

「大通公園を望む窓辺から」を企画するにあたって

情報広報部長 山科 賢児

今月号より新企画、「大通公園を望む窓辺から」が始まります。北海道医報は北海道医師会の公式記録の場であり、一方会員のコミュニケーションの場でもあります。北海道医報には通常の記事「指標、報告、季節風」などに加えて幅広い世代の会員からの自由投稿、依頼原稿の「会員のひろば」、テーマが決まっている依頼原稿「熊熊通信」によって、会員の声を会員各位に発信してきました。

理事会は現在総勢32名の構成ですが、理事たちが北海道医報への執筆の機会は今まで、指標など公式な報告書を書く時に限られていました。医師会の活動に関わっていらっしゃる会員の方々は、理事たちの顔や声はある程度思い浮かぶかもしれませんが、ほとんどの会員にとって、会長や理事たちがどのような人柄か、どのような考えの持ち主なのかは伝え聞くしか情報がありません。

今やツイッターやフェイスブックなどを用いれば、情報はどこまでもリアルタイムに拡散する時代となり、見知らぬ同士の遠い人間関係は近くなりましたが、家族関係などの近い人間関係は、逆に希薄となってしまいました。そのような環境で、北海道医報上での身内のアナログ情報のやり取りは、お互いの親密度を増すために何かしらの貢献ができるのではないかと考えています。

「文は人なり」と言われ、その執筆者の性格、人柄を案外表わすものです。今回このコラムを企画したきっかけは、どのようにしたら医師会と会員の距離を縮められるかを模索した中から出てきたアイデアです。700字前後の短さの内にもペンネームで書く自由さがあれば、このコラムをとおして、大通公園を望む北海道医師会館の会議室で理事たちは何を考えているのか、その一端が垣間見えるかも知れません。



大通公園を望む窓辺から

ドン 首領の裁量

最近のゴシップ報道で読売巨人軍の清武ゼネラルマネージャー（GM）が事もあろうか、プロ野球界の首領（ドン）である渡辺恒雄氏に対し来期のコーチ人事に重大なコンプライアンス違反があったとして公然と個人批判をした事件があった。言わずもがな渡辺氏は長年にわたり日本球界を牛耳ってきた大物で、政界、相撲界などにも影響を及ぼすほどの権力者である。

今回の清武氏の突然の行動をどう評価するかは、各自の判断に任せておくとして、ここで強調しておきたいことは組織の人事を含め重大な議案に関して最終決定者は誰に帰属するのかということである。常識的にはGMよりは位の高いオーナーのはずであるが、今回の事件は指令系統が明確でなかったために混乱をきたしたと言えよう。不当な鶴の一声として渡辺氏を痛烈に批判した清武氏は、当初から渡辺氏の直属の部下（新聞記者）として目をかけられ、多くの信望を得たあとにGMにまで上り詰めた出世人である。渡辺氏に対しては対等の立場でないにもかかわらず、今回の内乱劇ではGM個人の力のほうが渡辺氏のカリスマ性を圧倒してしまったわけである。

事の是非はともかく、清武氏に同情する人たちは予想とは裏腹に少数にしかすぎず、かえって批判の声の方が多く聞こえてきたのは妥当と言えそうである。今後は法廷での争いに移ろうとしているが、いずれにせよ、この混乱を引き起こした渡辺氏は速やかに球界の中枢から身を引いたほうが、世間からは評価されるであろうし、晩節を貶さぬことにもなるかと推察する。へたな泥仕合だけは避けていただきたいと思うのは巨人ファンのみならずすべての野球ファンの願いではなかろうか。

(三銃士)